6/8 朝日

思想統制の先には不幸待つ

文学者

小澤俊夫さん(87)

おざわ・としお　筑波大名誉教授で、専門はドイツ文学。口承文芸学者としても知られ、昔話研究の第一人者。弟は世界的指揮者の小澤征爾さん、息子はミュージシャンの小沢健二さん。

アピール

「共謀罪」

学問の世界から

「空気を読む」日本人と「共謀罪」が合わさると怖い。

日中戦争下の中国で小学生だった。陸軍病院を慰問すると、兵隊が「行軍中、道沿いの女子どもはスパイだから皆殺しだ」と手柄話をする。子供心に「人殺しだ」と思ったけど、とても口に出せない。「治安維持法は恐ろしい」と染みついていた。

ところが北京で評論雑誌を出版していた父は「中国の民衆を敵に回したこの戦争は勝てない」と軍部を批判するものだから、思想憲兵がいつも家で見張っていた。私は憲兵に指示された父の言いつけで、雑誌の墨塗りを手伝わされましたよ。

戦中に帰国したが、父は竹やり訓練を「馬鹿か」と笑って、所轄の特高課長が毎日家で監視。でも、なぜか無事だった。戦後、父の訃報を知った元特高課長から「真の愛国者だと確信していた」と手紙がきた。この人が父のことを上に報告せずにいてくれたのだろう。

「共謀罪」が怖いのは何が犯罪かを捜査機関の末端が決めてしまうこと。治安維持法と同じだ。父は無事だったけど、父の雑誌の編集員で拷問された人もいた。行き過ぎれば戦時中のように密告社会になるだろう。

密告社会で真っ先に標的になるのが不道徳、不健全、猥雑なものだ。政府に逆らいそうな者、空気を読まない者に疑いの目が向かう。表現の自由や豊かな文化にとっては致命的だ。

口承の昔話を研究すると、権力批判や金持ちを出し抜くストーリー、悪知恵や色話は世界共通。人間の本当の姿だからだ。興味深いことに、思想統制が厳しい国でフィールドワークをすると、昔話が政府の都合のいいように改変されていたりする。治安維持法におびえる戦時下だったら、果たして今のように豊かな昔話を研究できたか。

多様な言論が無くなると、国全体が狂気に包まれる。兵隊の残虐な自慢に衝撃を受けた私も終戦前は軍国少年。日記を読み返すと、ドイツ降伏を「神はヒトラーを見放したのか」なんて嘆いている。恐ろしいね。思想統制の先にはそういう不幸が待っていると、私は思う。（聞き手・後藤遼太）